

コーヒースレイク

「輸血を実施するには、どこがいい？」

仲宗根 雅司

(沖縄赤十字病院 医療技術部第一検査課)

輸血療法や輸血検査と聞いたら、どのような気持ちになりますか？本会誌は、臨床検査技師の学会誌のため、時間外勤務で輸血担当者以外の技師の皆さんは、「緊張する～」や「変な反応が出ないように！！」など様々な気持ちになると思います。この気持ちは良く分かりますが、今回、お話するのは検査の事ではありません。輸血療法を実施する場所として、皆さんはどこを思い浮かべますか？外来採血室や病棟、化学療法室など色々な場所を思い浮かべるとと思います。今、思い浮かべて頂いた中に、患者様のご自宅を挙げられた方はいらっしゃいますでしょうか。

これまで沖縄県の輸血療法の現状として、中規模医療施設以上での輸血実施が適切であると考えられてきました。沖縄県の特徴として、沖縄県では、輸血用血液製剤の98%を20施設で使用されております。これは全国的にみても特色があります。では、なぜ沖縄県では輸血実施施設の集約化が行われてきたのでしょうか。それは、輸血療法の特殊性があります。輸血用血液製剤の保管管理には、磁気記録計付専用保冷庫（アラーム付き）などの設備投資や血液製剤の期限の短さにより破棄等の問題があり、開業医や在宅医療の先生方の二の足を踏ませていたことも事実ですが、大きな問題として副作用への対応のため中規模医療施設での輸血療法が推進されてきました。

私も医療従事者ですので、病態によると思いますが急性期には集学的治療を要するため、入院加療が必要不可欠だと思っています。しかし、患者や患者家族では、在宅で治療が受けられる環境を望む場合もあります。そこで、在宅等による輸血実施状況の全国的な状況はどうなのだろうか？と調べてみると、日本輸血細胞治療学会の調査では、在宅及び病床を有しない施設での輸血は、約15%と報告されています。県外で在宅輸血をされている医師の方のお考えを勉強する機会はないかと調べてみたら、NPO 法人血液情報広場・つばさという団体を知り、その団体の活動の中で、在宅ネットの大橋先生などの講演を実際に現地でお聞きして、血液疾患などの治療に対しても在宅輸血が選択肢の一つになりえると実感しました。

NPO 法人血液情報広場・つばさの講演会を沖縄県で開催する事で、血液疾患の患者や家族、医療従事者への在宅輸血に関する情報を提供できるかもしれないと考え、NPO 法人血液情報広場・つばさへご相談したところ快く受けていただき、沖縄県赤十字血液センターや沖縄県における血液疾患の治療を行っている医師、県内と県外で在宅治療・輸血を行っている医師と共同で講演会を開催できました。

また、血液毒性等の発生頻度が低い抗癌剤では、携帯型精密輸液ポンプ等を用いて投与を行い、在宅へも繋げられる治療が始まっています。

今後、沖縄県において在宅や病床を有しないクリニックでの輸血療法が実施できる体制が整備されることを望みます。

今回、自分の専門分野に結び付いた活動を経験をしたが、このような活動をライフワークとして行っていきたいと思う。

